

阿波路の霊場を歩く

—鳴門の渦潮から焼山寺の遍路転がし—



愛媛大学法文学部教授
四国遍路・世界の巡礼研究センター長
胡 光
(えべす ひかる)

阿波へ入国

津屋崎村（福岡県福津市）の豪商佐治家一行7人が、江戸時代の弘化2年（1845）に行った四国遍路の記録「四国日記」（佐治洋一氏蔵、福岡県立図書館保管）を読み進めます。船で三津浜に上陸し、太山寺を打ち初めに四国を北上、55日で一周します。日記には、日々の歩いた距離、札所数、接待数、宿泊場所、費用、食事などが詳細に記録されており、今回は、3カ国目の阿波路に入ります。絶景・鳴門の渦潮も見物し、吉野川沿いに歩を進め、焼山寺への難所を経験します。

鳴門の渦潮を望む

4月5日、引田を発って海沿いに阿波国へ向かいます。現在では、海を見ながら走る国道11号線が整備されていますが、江戸時代には道がなく、小石の砂浜を歩きました。国境の碁の浦番所では、手形に通行日を記入します。その後、撫養の黒崎村に宿をとりました。

撫養は、古くから港町として発展し、江戸時代の絵図にも、大坂や和歌山と結ぶ定期航路が描かれ、四国の玄関口として知られていました。このため、宿屋も存在し、うどん屋播磨屋惣八のところに泊まっています。

通常は、百姓の家に泊まり、宿賃は15文、食事代66文が相場でした。接待の善根宿として宿賃をとらないこともあります。撫養では、食事代はほぼ同じ70文に対し、宿賃は50文も払っています。金毘羅門前町の宿屋では32文でしたので、撫

養の宿が四国で最も高価でした。ただし、宮島（広島県）では80文、西市（山口県）では120文、小倉（福岡県）では160文だったことから、四国の物価は低いことが分かります。

翌朝、船を借りて、大毛島へ渡ります。砂浜を歩き、山を越え、鳴門の渦潮を見下ろせる殿様（蜂須賀公）の御照覧場へ行き、渦潮を見物しました。「日本一の瀬戸にて、島々の模様景色能所也（よき所なり）」と記されています。しかし、潮時は悪く、渦潮はあまり見えませんでした。潮時が良ければ、海中に段ができるとも書かれています。私も観潮船に乗って渦潮見物した際、太平洋と瀬戸内海の境にできた大きな段差（滝）を目の当たりにして、驚いたことがあります。この辺りは、良い塩ができる場所としても有名で、塩田の風景も記録されています。

四国遍路の案内図にも、鳴門の渦潮は描かれ、他の遍路日記を見ても、渦潮見物に行ったことが記されています。遍路道からはずれ、船で渡ってまでして終日見物する「観光」的な旅の様子がうかがえます。



鳴門の渦潮

吉野川をさかのぼる

4月7日から、阿波の遍路旅が始まります。第一番札所霊山寺（鳴門市）は、四国への上陸口・撫養に近いことから、一番札所選ばれたものと考えられます。現在は、一番札所から順に回ることが一般的ですが、江戸時代には、自分の住居地に近い場所から回りました。このため、一番での「発心」や八十八番での「結願」などの文字は見られません。

一番から十番札所までは、吉野川沿いの平坦な道を上流方向（西方）へさかのぼるため、佐治家一行も二日間で歩き終えています。札所を結ぶ道は平坦ですが、四番大日寺・八番熊谷寺・十番切幡寺のように、門前から本堂まで北方へ山道が続く場合は、茶屋に荷物を預けて登ります。

五番札所地藏寺の奥の院は、五百羅漢で有名です。500体の羅漢は、実物大で彩色が見事であり「日本一なるべし」と記しています。大正4年（1915）に火災があり、現在では200体しか残っていないため、江戸時代の光景はもっと壮観であったことでしょう。江戸時代には、奥の院にも必ずお参りしています。

一番札所と八～九番の路上で、計3回の接待を受けました。赤飯・香物・月代（さかやき＝髪型のセット）の接待でした。一番札所では現在も、接待のために和歌山から訪れる接待講が続いていて、近畿地方に近い阿波霊場の特徴と弘法大師信仰の篤さを知ることができます。

十番札所までは、吉野川北岸を歩いてきました。十一番藤井寺に向かうには、吉野川を渡らなければいけません。河口から20km以上さかのぼってききましたが、大川であるため、歩いて越えることができず、渡し船に乗ります。渡し賃は、接待で無料でした。南岸にも村が乱立していましたが、宿を貸してくれるところが



吉野川を渡る

なく、敷地村（吉野川市）の五一郎宅でようやく宿を借りることができました。

遍路転がしを越える

翌日は、十一番を経て十二番焼山寺の往復となるため、宿に荷物を預けて出発します。片道158丁の往復、約34kmの行程になります。暮六ツ（午後6時）に戻りますので、約12時間で踏破したと推測され、相当な健脚と言えます。一行の中には老婆も含まれるので、驚くしかありません。現在は一番から歩き始め、比較的容易に十番まで来た後、急に険しい山道となり「遍路転がし」と呼ばれる最大の難所とされます。

一行は、焼山寺まで、4カ所の茶屋・茶堂で、餅・饅頭などを食して休憩しています。途上、弘法大師が休憩したという長戸庵、大師が柳の枝で掘ると水が出たという柳水庵、大師が立てた楊枝が大木になったという一本杉庵が伝説とともに記録されています。ただし、焼山寺より先にある、大師が衛門三郎を許したという杖杉庵には立ち寄っていないようです。

伊予・讃岐の遍路を経験した佐治家一行にしても、「ことのほか難所」「四国第一の高山」と感じた厳しい道でした。



第十二番札所焼山寺

【参考文献】

伊予史談会『四国遍路記集』伊予史談会双書、1981
塚本明・近藤浩二・胡光「巡礼と『道中日記』の諸相」『2013年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会、2014
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』ちくま新書、2020
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路と世界の巡礼（上）最新研究にふれる八十八話』創風社出版、2022